

## ホタルの輝きをいつまでも

(1)

赤村は、昔から清流にたくさんのホタルが飛び交う自然豊かでおいしいお米がとれる有名なところでした。田に水をひき、アユやウナギがたくさんとれる川は村に住む人にとって大切なものでした。

しかし、今から二十年ほど前、村の人たちは自然の様子が少し変わり始めていくことに気づきました。五月末から六月にかけて現れるはずのホタルが減ってきたのです。

赤村に住む人たちは、「もしかしたら、川が汚れているのかもしれない。このままでは村からホタルがいなくなる日がやってくるかもしれない。何とか赤村のホタルを守らなければ。」と考えました。

ホタルは、たまご・幼虫・さなぎ・成虫と変化する昆虫です。たまごは、水辺の岩やよけなどに生み付けられます。幼虫になると水中でカワニナという巻き貝を食べ過ぎて過ごします。そして土手が上がって土の中でさなぎになり、成虫になると水辺の草むらなどで過ごします。

川や川の周りの自然を一人で守ることはできません。十六年前、赤村に住む小川さんたちは「赤村ホタルの会」を作りました。

小川さんは、まず、何が原因なのか調べることにしました。そこで川の自然がどのくらい守られているか川の調査をしました。すると洗剤や農薬が原因の一つであることがわかりました。そして護岸工事などでさなぎになれる場所が減っていることがわかりました。

「村の人たちにこのことに気づいてもらい、一人一人が生活を見直さない限りホタルがたくさん住む自然を取り戻すことはできない」

そう考え自然を守る呼びかけを会う人一人一人に話したり、村の広報(新聞)で行ったり、チラシを配ったりしました。

ゴミや大雨でながされた泥など川の清掃活動にも取り組みました。そして少しでも美しい川にもどそうと頑張りました。

さらに、カワニナがどこに住んでいるのかも調べました。

ホタルやカワニナを育てるための飼育施設を作るための募金箱づくりにも取り組みました。源じいの森やゆうびん



局、赤村特産物センターなど村のいろいろなところに設置してもらえるようにお願いして回りました。最初は、「そんなことをしても何も変わらんよ」という人もいましたが、ホテルの会の人たちが、よびかけ続けるうちに協力してくれる人も少しずつ増えていきました。

ホテルが生きていくためには、幼虫が住みやすいところを作らなくてはなりません。そのために川にホテルブロックを設置しました。そして、育てた幼虫やカワニナは、みんなで川に放流しました。

このような取り組みによって次第にホテルの数は増えていきました。

## (2)

ホテルが出る季節になると、福岡県中からたくさんの人たちが赤村の美しいホテルを見に訪れます。バスツアーでやって来る人たちもいます。

小川さんは、この時期になると「ホテルをとらないで下さい」という看板を立てて回り、ホテルを守る呼びかけをします。しかし、中にはたくさんのホテルをとってしまおう人もいて、ほとんどいなくなったことがありました。

あるとき、ホテルをつかまえようとしている人がいました。

「みんなのものなのでとらないで下さい」と伝えました。しかし、「うるさい。あんなたちのもんやなかるうもん。そんなこと言われる筋合いはない。」と言われ、全く聞いてもらえませんでした。

それでも小川さんは、「とらないで下さい。」と伝え続けたのです。

ホテルの会の人のなかには、このようないけんを持つ人がたくさんいます。

そこで、小川さんたちは、「強い洗剤や農薬、油を川に流さない」「家でプラスチックを燃やさない」「ホテルをとらない」など村の決まりを作ってくださいと役場や議会の人たちにお願いをしに行きました。しかし、農薬を変えたり、ゴミのすて方を変えるなどなかなか村全員の決まりを作ることはかんたんではありませんでした。

村の人と会うとき、いっしょに仕事をするとき、小川さんたちは、その話を少しずつ伝えていきました。

するとそのことを知った人たちが関心を持ち始め、しだいに赤村のたくさんの人たちにつたわっていきました。そしてついに、ホテルを守る決まりが作られました。今では「ゴミを燃やしても大丈夫なのか」など、小川さんたちに相談する人もいて、洗剤や農薬について多くの人たちが気をつけるようになっていきます。